

Agilent Eagleware-Elanix Genesys による

RF サブシステムレベルにおけるレシーバ解析 Genesys WhatIF と Spectrasys

Genesys Application Note 3



GLEWAR

A Seamless Design Flow with Outstanding Price and Performance





From Start To Finish using SPECTRASYS



Agilent Technologies



はじめに:

RFサブシステムレベルの設計を行うには、エクセルなどの表計算ソフトを利用しながら 各段におけるゲイン変化などを検証することが多いと思われます。確かにこの方法は、 簡単な回路構成の場合の解析には向いていますが、回路構成を変更したり、各段のイ ンピーダンスを変化させたり、回路が複雑化した場合、さらに長期にわたってメンテナン スする場合には不向きな場合があります。

ここでご紹介するGenesysのSpectrasysは、カスケードゲイン、NFなどの解析に加え、 スペクトラム表示をさせてそのスペクトラムの発生経路をビジュアルに表示させたり、回 路合成機能をRFサブシステムレベルから呼び出しフィルタを合成するなど、表計算ソフ トではカバーできない機能を持っています。

本アプリケーションノートでは、これらの機能、利用方法について順を追ってご紹介いたします。



ビヘイビアブロックの入力:

表のような仕様で、レシーバを組み上げます。この仕様を満たすように、ビヘィビアブロックを組み上げます。



WhatlFを利用したスプリアス解析:

WhatlFを利用して、IF周波数帯域における相互変調歪みの浸食によるスプリアスの影響を解析します。

さきほどの表に示された仕様を満たすように、"Input"タブ内に情報を入力します。

今、RFとLoの関係は、RF周波数よりも低い周波数でLoを入力するとして、その差をIFと することにします。RF中央周波数、帯域は表に書かれているように1000MHz、10MHz と入力します。IFの帯域は1MHz程度として、RFの入力は-20dBm、Loの入力は7dBm 程度としておきます。ここでは、大まかにIF周波数帯域におけるスプリアスの影響をみる ことが目的であり、これらの設定をそれほど厳密に行う必要はありません。

"Apply"ボタンをおして、グラフ表示させます。

グリーンに書かれた部分がスプリアスフリー領域、ブルーがスプリアス領域で、横軸周波数、縦軸がIFに対するスプリアスの大きさを示しています。

今、100MHzをIFの周波数としたいため、100MHz近辺をマウスカーソルでなぞります。 すると19.5MHzから193.3MHzまでグリーンのスプリアスフリー領域であることが確認で きます。

以上でWhatlFを利用したIF周波数帯域における相互変調歪みの浸食の影響の解析を 終えます。



ここでは、ビヘィビアブロックを入力するためのエディタの説明をします。

スケマティックウィンドウをアクティブにしたときに表示されるツールバーからシステムコンポーネント用のツールバーを呼び出し、ビヘィビアブロックの入力を行います。

ビ ヘィビアブロックの入 信号源の設定	力						
System CW Source CW Source Wideband Source Multicarrier Source Intermod Source Receiver Intermod Source Continuous Frequency Source Noise Source	CWSource_1' Pro General Parame PORT P	perties ters Simulation Custom Sch Description Port Number Center Frequency	Image: Second secon	etlist Units	Default Use	Default Tune Show	×
CWSource_1 F=1000MHz Pwr=-60dBm	PWr PH R PD Display pare	Power (Average) Desses Chain Source Resistance	60	(Chm) (Chm)	-20] 0 50 50 1 <u>3</u> Check Defau () Reference I ***>*t2)L	■ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ	its o 7
Page 5		Agilent Teo	chnologies			R	ev.1.0

信号源の追加:

"Sources"カテゴリから"CW Source"を選択します。この信号源は、指定された周波数 の信号をシングルトーンとして発生することができます。ここでは、1000MHz、-60dBm の信号とし、パワーはチューニングできるように設定します。チューニングパラメータはラ イトグリーンになります。

また、マルチトーン設定をする場合は、A;Bのように周波数をセミコロンで区切ります。



アンプの追加:

アンプは"RF Amplifiers"カテゴリから"RF Amplifier-2nd 3rd order"を選択します。この モデルには、アンプの線形、非線型領域を設定するために、1dBコンプレッション、IP3 などを設定することが可能です。

アンプに限らず基本的に各コンポーネントでは、入出力のインピーダンスを任意に設定することも可能です。



ミキサの追加:

ミキサは、強い非線形性により周波数を変換するコンポーネントなので、その非線形性を決定するために1dBコンプレッション、IP3などを設定する項目があります。



バンドパスフィルタの追加:

このフィルタは、IFフィルタの役目を果たします。IFは100MHzに設計予定なので、パス バンドを95MHzから105MHzとします。



アンプの追加:

このアンプは、先ほど追加したアンプを複製し、フィルタの先に追加します。GenesysにはDuplicate機能があり、Cntrl+Dで指定したコンポーネントと同じものがDuplicate(複製)されます。



ローパスフィルタの追加:

このローパスフィルタは、前段のIFアンプから発生する可能性のある高調波をカットするために追加します。100MHzのIFを通すために、カットオフ周波数を105MHzとします。



ローカル発振源の追加:

このコンポーネントも、はじめに追加したシングルトーンの発振源と同様に信号源として 動作します。1GHzのシングルトーンがRFとして入力され、IFを100MHzにするためには、 900MHzのローカル周波数にする必要があります。ここでは、RFに対して低いローカル 周波数によってIFを取り出します。

ローカル周波数はチューニングできるようにチューニング欄にチェックを入れます。後ほどのスペクトラム表示で、ローカルを振ったときのIF、相互変調歪みの出力変化を確認できるようになります。

最後に出力ポートを追加します。

このポートは、アルファベットのOキー(Outputの意)を押すと、シンボルが追加できるよう になります。

これで、ビヘィビアブロックの入力が終了しました。



シミュレーションコントローラの追加:

次に、SpectrasysのSystemシミュレーションコントローラを追加します。

左下のWorkspaceTreeウィンドウにあるAdd New ItemからAnalysesを選択し、Add System Analysisを選択します。



ここで、信号源とパス、ノード番号についてまとめます。

Spectrasysの解析では、これらの3要素が大変重要な役割を果たします。

信号源:

Spectrasysでは、信号源から発生した信号をトラックしていき、どのように周波数変換されるのか、高調波が出るのか、増幅、減衰されるのかを解析します。また、発生経路を表示しますので、どの信号源から出ているパワーであるのかを設定することは、必須になります。

パス:

カスケードゲイン、NFを表示するためにどのパスのコンポーネントによる変化なのかを表示させるために、パスの設定が必須になります。

ノード番号:

パスを設定するために、パスの始め、終わりをノード番号で指定します。コンポーネント を追加したり、削除するとノードの割り振りが変更されることがありますので、注意が必要 です。回路図を変更させた場合には、ノード番号の確認をするように心がけてください。



システムコントローラの設定画面について

Generalタブ:

WorkspaceTreeウィンドウのSystem1をダブルクリックすると、システムシミュレーション 用のコントローラウィンドウが開きます。

回路図に存在する信号源はすべて自動的に表示されます。ここから、Editボタンを押す と、ソースのプロパティウィンドウを開いて編集を行うこともできます。

ここで、特に重要なチャネルの概念についてまとめます。

Spectrasysでは、パワーを算出するためにチャネルという概念を用います。発信源からのトーン周波数の周りをチャネル帯域として指定した部分とそれ以外の部分に分けます。 ミキサによって周波数変換が行われますが、その場合にもチャネル帯域はトラックされます。

aths						
vstem Simulation Parameters					×	
General Paths Calculate Composite Spectrum Options				パフ	の始点における	周波数
Add All Paths From All Sources	Add <u>P</u> ath , to Node)	Channel Fr	Delete All Path	ns ここ Gen 」域の	に指定された周 heralタブで設定さ Dパワーが算出さ	皮数を中心に されたチャネル帯 されます。
Path1 1,6		at start no		Delete _ 何も	指定しない場合	は、始点のソース
1 7				(こ打 周辺	旨定されている周 と数として設定され	波数が、チャネル nます。
バスの設定				たた。	し、複数の周波 と定されている場	数がソース周波数 合は、一つを明示
パスの名前 始点,終点				的に	指定する必要が	あります。
	++	S	ystem Simulation Pa General Paths Calc	irameters ulate Composite Spec	rum Options	×
☐ Add Powers, <u>Voltage</u> , 始点、終点において複数のハスか、 する場合は、明示的に指定されなし	仔仕 い限り		Bdd All Pa	this From All Sources	Add Bath	Delete All Paths
Lactory Defaults 短い距離のパスが選択されます。	++12	94 <u>-</u>	llame	Path (from	lode, thru llode, to llode)	Channel Frequency at Start Hode (MHz)
			Path1 Path2 Path3	1,2 3,2 3,1		Delete Delete
			Path4	1,3		Delete
	Add All Paths					
	を選択すると、 上で考えられ	回路図 るすべて	Add Powers, Volta	ages, and Impedances to	Path Dataset	
	の経路を選択 ができます。	すること	Eactory Defaults		OK 442	セル 通用(2) ヘルフ

Pathタブ:

このタブでは、パスの設定をします。パスには、始点、終点のノード番号を記入します。 また、どの周波数をチャネル帯域内にトラックするかを設定します。通常、始点に設定されている信号源の周波数を指定します。何も指定しない場合は、自動的に始点に設定 される信号源の周波数が設定されます。

ノード番号は、コンポーネントを追加、削除するときに変更される場合がありますので、 意図せず指定したパスも変更される場合があります。コンポーネントの追加、削除を行っ たら、ノード番号の変化の有無を確認するようにして下さい。

Add All Pathボタンを押すと、信号源と出力ポートの考えられうる組み合わせすべてが 選択されます。



Calculateタブ:

このタブ内部では、スペクトラム表示において高調波、相互変調歪を算出させるかどうか、 高調波の次数の設定、NF、ノイズフロア、フェーズノイズの算出をさせるか等の設定を 行います。NFの計算を行わせる場合には、必ずCalculate Noiseのチェックボックスに チェックします。算出させる周波数帯域が広いなどの理由で、解析時間が遅くなる場合 以外では、Calculate Harmonics、Calculate Intermods、Calculate Noise、Calculate Phase Noiseのチェックボックスにチェックを入れておきます。

リストによるSpectrasysの解析結果の表示	
m model CalculaterK52emLst intercent intercent intercent intercent intercent	
Page 17 Agilent Technologies	Rev.1.0

解析結果の表示:

パスの設定を行った後、赤くなっているCalculateボタンを押し、解析を実行します。解 析を行うと、解析結果がデータセットという形式で、WorkspaceTreeウィンドウ内に保存 されます。

結果を表示するには、ポートを右クリックし、クイックリストを表示させて解析結果を呼び 出す方法と、グラフウィンドウからMeasurementウィンドウを利用して解析結果を呼び出 す方法があります。ここでは、前者のクイックリストによって解析結果を呼び出す方法を 紹介しています。

ここでは、カスケードゲインを表示させることにします。



グラフの重ね書き:

さきほど表示させたカスケードゲインのグラフにカスケードNFのグラフを以下の手順で 重ね書きさせます。

1) カスケードゲインのグラフをダブルクリック

→するとプロパティウィンドウが表示されます。

2) MeasurementWizardを開きます。

→データセットの選択ウィンドウが開き、デフォルトのSystem1_Data_Path1のまま Nextを押す

3) CNF (カスケードNF)を選択しFinishを押す

4) プロパティウィンドウにもどり、CNFの欄のOnRightにチェックを入れ、NF用のY軸を 右側に新たに設定します。

5) OKボタンを押すと、カスケードゲインにカスケードNFが重ね書きされたグラフが表示 されます。初段アンプの出力部分のNFをマウスをなぞってみると、NF=3になっているこ と(アンプのプロパティで設定されている)を確認します。



チャネルパワーとトータルノードパワー:

チャネルパワーは、System解析コントローラで指定されたチャネル帯域内部のパワー 積算値、トータルノードパワーは、チャネル帯域に関係せず、全帯域のパワーの積算値 を表します。

WorkspaceTreeウィンドウのNewItemボタンから、Rectangular Graphを選択し、直行 グラフのグラフプロパティを表示させます。チャネルパワー、トータルノードパワーそれぞ れは、MeasurementWizardを利用してそれぞれ選択します。(略記号はCPとTNP)



スペクトラム表示とルートコーズ解析:

ミキサは非線形性の高いコンポーネントであり、その出力には様々な周波数成分が含まれています。 ここで、ミキサの出力をスペクトラム表示させ、どのような周波数成分が発生しているか、ルートコーズ解析 機能を利用してみていきます。

1)ミキサとフィルタのつなぎ目(ノード)を右クリック

→Add New Graphのリストが出てくることを確認

2) そのリスト中のSystem_Data New Power Plot at Node Xを選択

すると、図に表示されているようなスペクトラムが現れます。スペクトラムにマウスをあわせると、スペクトラムの発生経路、周波数の成り立ちについてバルーン表示されます。 一番大きなパワーは、RFイン-ローカル周波数=100MHzです。

3)800MHzのスペクトラムにマウスをあわせます。

→(2xローカル周波数-RFイン)が800MHzの周波数を構成していることと、RFイン(CWSource_1)から 発生していることがわかります。

この800MHzの周波数成分は、一見RFインとローカル周波数の関係から想像がつきにくいですが、ルートコーズ解析機能を利用することで、視覚的に確認をおこなうことができます。

次にローカル周波数とIFの関係を視覚的に調べます。

4) チューニングウィンドウからPwrOscillator_2の900を選択し、チューニングを行い、100MHzのIFがどのように変化するか、また高調波、相互変調歪みがどのように変化するかを確認します。

5) PwrOscillator_2の値を900に戻します。



イメージリジェクションフィルタ:

今まで解析を行ったレシーバのブロックダイアグラムには、イメージリジェクションフィルタがありません。このフィルタがないとどのような弊害があるか、ここでまとめます。

イメージリジェクションフィルタの感覚的な動作は、スーパーへテロダイン構成のレシー バでミキサによってダウンコンバートするときに、USBもしくはLSB側の利用しない帯域 に存在するスプリアスを除去することです。しかし、このイメージリジェクションフィルタは、 スプリアス除去だけでなく、明示的なスプリアス信号が存在しなくても、利用されない帯 域に存在する雑音をミキサによってダウンコンバートされることを防ぐ役割も持っていま す。

ここで、カスケードNFを確認すると、ミキサ段の部分でNFが急激に増加していることが わかります。これはイメージリジェクションフィルタが存在しないために、上記の理由から NFが悪化してしまっていることを示しています。



イメージリジェクションの追加:

1) CWSource_1とRFAmp_1を選択し、ALTキーを押しながらミキサ(BasicMixer_1)から切り離します。

2) RFAmp_1とBasicMixer_1の間にバンドパスフィルタを挿入します。

3) N=3段、カットオフをそれぞれ990MHz、1010MHzとし、1000MHzのRFイン信号 (USB)のみを通過させるようにします。

4) CWSource_1のノード番号、出力ポート(Port3)のノード番号をみて、フィルタを追加 した前後で変化がないか確認します。

5)もし、変化があった場合にはパスの指定も変化してしまっていますので、SystemコントローラのPathタブでCWSource_1からPort3までの経路が指定されるようにノード番号を指定し直します。

6)赤くなっているCalculateボタンを押し、解析をし直します。



イメージリジェクションフィルタの効果を比較した図を示しました。左側が、イメージリジェクションフィルタなしの場合、右側がフィルタを追加した場合です。

イメージリジェクションフィルタがないときには、ミキサにおいてNFが急激に悪化していましたが、イメージリジェクションフィルタを追加した後では、NFの悪化がかなり改善されていることがわかります。

今回の設計仕様では、NFを5dB以下に抑えることを目標にしてきました。イメージリジェ クションフィルタを追加することにより、この目標を達成できました。



分布定数フィルタ合成:

トップレベルのビヘィビアブロックを回路合成機能を利用して、回路に置き換える方法を ご紹介します。

先ほど追加したイメージリジェクションフィルタを分布定数フィルタに置き換えてみます。 1)イメージリジェクションフィルタを右クリックし、Synthesize Subcircuitのリストを表示させます。

2) As Microwave Filterを選択します。

→すると分布定数フィルタの回路合成ツールが起動します。

3) TopologyタブでTypeをBandpassに設定し、SubtypeをHairpinにします。

→即座にヘアピンの回路が合成され、線形解析結果が表示されます。

ここまでで、インピーダンスと電気長を利用したTLINによる回路合成は終了です。ここからは、この合成された回路を、実際の物理パターンに変換する操作を行っていきます。

4) OptionタブのCreate Layoutチェックボックスをチェックします。

5) Optionタブで、大きめのボタンであるSelect Manufacturing Processを押し、実装方法を選択します。

→次のページに続く

続き	
Convert Using Advanced TLINE	X Substrate Needed
Process Coog Sugare Coax (Square Conductor) Square Coax (Square Conductor) Square Coax (Round Conductor) Coglanar Coplanar With Ground Conversion Frequency: 2000 MHz Conversion Frequency: 2000 Conversion Freque	If You have used a component or feature that requires a substrate. GENESYS will now allow you to add a substrate. Please load an existing substrate from a library or create your own. Note: If you do not want this substrate, you can later remove any elements using it and delete the substrate. If If Create New Substrate If Create New Substrate Ease load From Library If Create New Substrate If Create New Substrate If Ease load From Library
Substrate Properties Name: Person Planeters (Er) Dielectric Constant: 4.6 (Tand) Loss Tangent: (Thick) Metal Thickness: 0.0361 (Thick) Metal Thickness: 0.0024 デフォルトでFR4の基板 (Height) Substrate Height: 1.4986 For prom Metal Roughness: OK Copy From Metal Roughness: OK Cancel Heip	■ The second
Page 25	Agilent Technologies

6)実装ProcessとしてMicrostripを選択します。

7) Substrate(基板特性)は空欄のままにしておきます。(まだ設定していないため、選択 できる候補がない)

8) OKを押すと、小さいウィンドウでSubstrate Neededの表示が出てきますので、右側のCreate New Substrateボタンを押します。

9) 基板特性のウィンドウが表示され、デフォルトでFR4基板特性の値が入っていますので、そのままOKを押します。

10)回路図ウィンドウは、インピーダンスと電気長だけのTLIN部品から、MLINやMTEE 等の物理形状+基板特性による部品に置き換わります。

11)回路図ウィンドウ下にあるLayoutタブを選択すると、図のようなレイアウトが生成されていることがわかります。

このレイアウトは、DXFファイルなどとして外部のCADへExportすることが可能です。

まとめ

- 1. WhatIFを利用してIF帯域のスプリアスの影響がないことを確認
- 2. ビヘィビアブロックの入力
- 3. Spectrasysコントローラの設定
- 4. バジェット解析(カスケードゲイン・NF・チャネルパワー)
- 5. スペクトラム表示とルートコーズ解析
- 6. イメージ帯域のミキサによるNF劣化
- 7. トップレベルからの回路合成

Agilent Technologies

まとめ:

Page 26

ここまでで、決められた特性のレシーバを、上に示された順序でSpectrasysを利用しな がら設計、検証を行ってきました。本アプリケーションノートでご紹介した内容は、 Spectrasysの基本的な利用方法と基本操作のみを網羅しています。カスケードゲイン、 NF、チャネルパワー以外にも、多数の解析項目があり、検証することができます。詳しく はマニュアルをご覧下さい。



まとめ:

ここでは、表計算ソフトではカバーできない機能についてまとめてみました。 これらの機能を用い、さらに幅広い用途、多角的な解析にSpectrasysをご利用いただければ幸いです。



参考:

この図は、SPECTRASYSの信号源の設定方法を示しています。

変調信号を扱う場合、主要な波形はあらかじめライブラリとして登録されていますので、簡単に呼び出すことが可能で す。

また、必要に応じて任意に編集することも可能です。

Genesysアプリケーショントート#3



·参考文献

周波数コンバータの雑音指数測定 (弊社アプリケーションノート#1487)

・ワークスペース一覧

本アプリケーションノートで利用している Genesysワークスペースファイルは弊社の Webよりダウンロードできます。以下の一覧は、 ワークスペースファイル名と解析内容との対応 を示します。

1. ビヘイビアブロック

spectrasys1.wsx

2. カスケードゲイン・NF、スペクトラム表示

spectrasys2.wsx

3. イメージリジェクションフィルタによるNFの改善 spectrasys3.wsx

·改訂履歴

2007,1月初版

アジレント・テクノロジー株式会社 本社 〒192-8510 東京都八王子市高倉町9-1

TEL 200120-421-345 (0426-56-7832) FAX 200120-421-678 (0426-56-7840) E-mail:contact_japan@agilent.com

Agilent EEsof EDA ホームページ http://www.agilent.co.jp/find/eda

記載事項は変更になる場合があります。
ご発注の際はご確認ください。

Copyright 2006 アジレント・テクノロジー株式会社

